

## ヨーロッパの歴史の特徴を日本史側から見えます

日本人にとって、日本史についてはどうしても馴染みがあります。奈良時代や平安時代など今日の日本人の社会とは別次元のようにも思えますが、それでもなんとなく納得感があります。戦国時代や江戸時代になりますと、もっと身近になり、政治、社会で活躍した人々を尊敬の対象とします。

ヨーロッパとは、戦国時代までまったくと言って言いほど日本とは隔絶されていた。

江戸時代は一般の日本人はほとんどヨーロッパでの政治的、社会的、経済的、文化的な様子を知りません。

ヨーロッパの歴史を日本人が知ったのはごく一部のを除いて明治に入ってからです。

ヨーロッパ史をひもとく時、横文字やカタカナの人名と地名がでて来て取りつきにくいことは置いて、理解できない事柄が出てきて、何故だろうと思いつつながら先を読まなくてはならないことを経験されませんか。

その何故を世界史の教科書では教えてくれません。

人間の歴史ですので、そんなに突拍子もない、とても日本人には理解不能とすることもないと思います。

ここでヨーロッパの歴史の主要な事柄を我々の日本の歴史と比較することで、ヨーロッパの歴史の特徴を見ることにしたいと思います。

### 1、民族の多様性

ヨーロッパはアジアを入れてのユーラシア大陸の西側に位置します。大陸の地続きです。この大陸には紀元前の古代から大ざっぱに言って西側には白人、東側と中央には黄人が居住します。さらにそれぞれ多くの民族、部族に分かれています。当初、部族は同じ地域に住む5万人位が単位であったと言われています。

ギリシャ人やローマ人のように古代からその地を動かない民族もいますが、白人でもゲルマン人は他の部族に追われて古代末から中世にかけて激しく移動する部族もいます。

この移動の理由は有力（武力）部族に追われた部族が難民状態で次から次へと押し出し移動するのです。

中世初めに一応移動は落ち着きます。しかし居住した地域の隣りとの縄張り争いは続きます

同じ言葉を話す者たちが集まって部族長（王になる）を決めて戦い合います。王権は子孫へ継承され王家となり、部族の有力者は貴族になり、勢力範囲の住民を領民として支配・統治します。王朝国家が形成されます。

隣国の領地の取り決めは戦争や話し合いで決まります。話し合いだけの取り決めでは不安定ですので王族間で婚姻関係を結びます。

ここでは民族が違うから婚姻しないなど王族たちは言いません。ギリシャ人、ローマ人、ゲルマン人のフランク人、ドイツ人、スラブ人はどことも相互に婚姻します。政略結婚です。ヨーロッパは一つです。王家どうし、貴族どうしには民族、部族の意識はありません。ただ自分の支配領域を確保するだけです。

一方一般の領民たちは遠くの地域の人との付き合いは少なく、婚姻関係はありません。言葉の通じる範囲での付き合いです。

ヨーロッパの人々に民族意識が出て来るのはフランス革命の影響で王朝国家がら国民国家（主権在民）に代わった以降です。ですから19世紀の半ば頃からです。

国民国家形成の思想は次に民族国家、一民族一国家の思想になって行きます。

一般国民からもこの声は上がります。一方政権側も王朝国家や多民族で構成される帝国より民族国家の方が国民の国への帰属意識が強く、兵士は民族国家の方が強いことが分かって来ました。

政権と一般国民はあげて国民・民族国家へ走ります。走り過ぎて近代には国家主義、軍国主義に向かう国が出てきます。

さて日本での民族ですが、九州での隼人族、山陰の出雲族が古代有名ですが、大和朝廷が早い時期に大和民族に吸収してしまいます。独立運動は続きません。東北の蝦夷も平安時代末期には大和民族に吸収されます。今も自分は隼人族だ、出雲族だ、蝦夷だと名乗り、先住民としての待遇を求めたり、独立を叫ぶ人はいません。

ただ北海道のアイヌの日本人への同化は明治以降で先住民としての処遇

が言われています。ただ江戸時代もアイヌ民族の人口は少なく2～3万人と推定されています。

この人達も北海道の各地域に分散して居住しており、民族すべてでの団結はありませんでした。又全体での王朝国家の形成はありませんでした。

沖縄も明治に入って日本国に吸収されました。特に民族問題は起こっていません。

日本の大和王朝（大王一天皇）は5世紀ごろに出来、中央集権国家を形成します。以降この王朝（天皇）を倒そうとする者は現れませんでした。

これがヨーロッパ史でも中国史でもない所で何故かと問われれば返答に難しい所です。。

但し、平安末期から武士が政権をとり、大和朝廷の中央集権政治を崩し、封建制度となります。平清盛、源頼朝から徳川幕府の江戸時代までです。それでも大和王朝（天皇家）を倒しません。そのまま尊崇の権威として残します。そしてその権威を利用して天下を治めようとします。

平安時代にも摂関家の藤原氏が実権を持ち天皇を上回る権力を持ちますが天皇になろうとはしません。徳川氏はこれまでの武家政権の権力を越える実権を持ちますが、天皇家を自分の上に頂きます。

この理由はいくつか説がありますが、ここでは一つだけあげます。

「実権も形もトップに立つと必ず政権を打倒としようとする者が必ず現れる。伝統の権威（天皇）を形の上でトップにし、自分はその下にしておいて自力（政治力と武力）と併せ権威（天皇）に守られる政体にして権力の持続を計った」

## 2、封建制の中味の違い

ヨーロッパは中世から王政、封建制になります。日本も中世から封建制になります。但しヨーロッパの中世は5世紀末からで、日本の中世は12世紀末からです。

ヨーロッパの封建制と日本の封建制は似ているのですが、異なるところもあります。

君主（王）と家臣（貴族）は主従は関係にあり、戦争の時は家臣は自分の家来を連れて参戦しなければなりません。君主はその見返りとして領地を与えます。ヨーロッパでは、両者は双務契約と言われます。

一方、日本史では源頼朝時代は、頼朝と御家人の関係は御恩と奉公の関係

とされています。頼朝の家来（御家人）となって戦うことを奉公、その見返りに本領安堵（領地の保証）してもらい、更に新恩給与（新しくもらう領地）をもらうことが御恩です。

こう見ますとヨーロッパも日本も同じように見えますが、日本の主従関係は、時代が下るにつれて家来は君主（主人・殿様）への忠誠心を強調されるようになります。

次に君主（殿様）や貴族（家臣）が領主としての領民への税のかけ方です。ヨーロッパの領主は農地のほとんどを所有し、領民に自分の所有農地に賦役をかけます。（給料なしで働かせます）君主、貴族の直営方式です。

それに対し、日本の領主は自分では土地をほとんど所有せずただ領有するだけです。農民は自分の決められた耕作地を耕し、その収穫から一定の年貢を領主に納めます。

ヨーロッパは領主が農地を所有します。領主は地主で、土地の売り買いは自由です。日本の領主は土地を所有はしません。（室町時代以降は全く所有しない）ただ領有するだけです。所有権はありませんので貧しくなっても農地を売れません。収穫からの年貢を得ることが出来る統治権を持っているだけです。

ヨーロッパの領主と日本の領主どちらが有利かと思われませんか。

実はヨーロッパの領主は行き詰りました。領民（農民）は一生懸命働いても、怠けようとも週3日程度領主に勤労奉仕をすればいいのです。ですから生産性が上がりません。一方日本の年貢方式は、領民（農民）が一生懸命働いて収穫が多いと領主も農民も利益が上がります。

ヨーロッパの領主（貴族）は直営から賃貸（地代）方式に切り替えようとしたが、遅きに逸しました。

### 3、日本になかった議会制度

日本には江戸時代まで議会はありません。議会はただの会議ではありません。

ただの会議は出席メンバーが討議して決定事項を上申したり、上司より指示を受けたり、連絡事項を受けたりします。

議会の主要な権限は政権（王、大統領、総理大臣）への権力の抑制です。今でもそうです。

ヨーロッパではギリシャでもローマでも共和制でも王制でも議会がありました。

政権を担うものは議会から選ばれる又は承認が必要です。更に国の方針の主要事項の決定についても、原則政権は議会の承認を得る必要があります。

これは中世ヨーロッパが全て王制になっても議会は存在し、今日においても国家の最も重要な機関です。

中世は共和制はなく王制ですが、ほとんどの王は地域の豪族達、貴族達から推戴されて王に就任します。もちろん王家は子孫に王位を継承できます。

一旦王位に就き、戦いに勝っていくと王権はだんだん強力になりますが、それでも議会は王の専制が強くなることを抑えます。増税、貴族の特権を減ずる政策は認めません。王が専断しようとしみますと王位をはく奪します。

中世当初、議会は貴族で構成されていましたが時代が進むにつれ有力市民もメンバーになります。

17世紀には王の力が強くなって絶対王政時代と言われ、いったん議会の力は無くなりますが、19世紀以降（フランス革命以降）主権在民の思想が定着していき普通選挙の下、議会は選挙で選ばれた成人の男性。女性によって構成されていきます。

これがヨーロッパの政体が日本の江戸時代までの政体と違う所です。

日本では大和王家（天皇）も武士で政権を取った将軍等も自力の武力で政権を取りました。家臣たちの推挙によるものではありませんので権力を抑制する議会は出来る余地がありませんでした。

日本では明治に入って、ヨーロッパに見習って議会制度を取り入れました。

#### 4、宗教改革と政治

西ヨーロッパの中世、近世のキリスト教界ではローマ教皇の権力が王たちの権力を上回る事態になります。これに不満を持つ王や貴族がある中で、ルターやカルビンが宗教改革を訴えます（16世紀初め）。カルビンやルターは純粋にキリスト教の教義上からローマキリスト教界に反発しますが、この運動が予てローマ教会に反発していた王や貴族たちと組んで大騒動なつたのです。

結局、キリスト教はローマカトリック（旧教）とプロテスタント(新教)に分かれます。

だいたいどこの国も宗教機構を支配するのは王が普通です。キリスト教も東ローマ帝国のキリスト教（後のギリシャ正教、ロシア正教会）も皇帝

(王) は教会を統治していました。

ローマ教会は西ローマ帝国が消滅しましたので、保護される政権がなくなったため、自立せざるを得なくなりました。その後フランク王国や神聖ローマ帝国との間でローマの皇帝に代わって王位や皇帝を認証する役を担うこととなります。そこでローマ教皇（ローマ教会のトップ）は王や皇帝より上位の観念となり、統治権の一部（課税権等）も持つようになりました。

しかし王・皇帝と教皇は権力争いをします。

この宗教戦争は、神聖ローマ帝国のハプスブルグ家、フランス、スペインがカトリックに残り、ドイツ、北欧諸国やイギリスがプロテスタントとしてローマ教会から離脱し決着を見ました。

実はこの宗教改革のあおりで当時の戦国時代に日本にキリスト教（耶蘇教）の布教が行われました。

宗教改革は上記権力争いと共に信仰について、カトリック（旧教—ローマ教会）に対するプロテスタント（新教）の改革要求があります。

ローマ教会は改革の要求を飲みませんが、カトリックの中でも腐敗した教会の是正に乗り出した人々がいます。この人たちはローマ教会（カトリック）の中で改革していこうとする人々で、反宗教改革の運動と言います。

この人々の団体にイエズス会があり、ヨーロッパ以外の国々への布教を熱心に行っていました。日本に来たフランシスコザビエルはここから派遣されて来たのです。（1549年）

## 5、ルネサンス

中世後半に起こったギリシャ、ローマの古典の復興、文芸復興としてとらえることが多いですが、実はヨーロッパの科学技術の革新的発達が重要です。

それは航海に関する技術の飛躍的な発展です。

羅針盤の改革、帆船の発展（竜骨船建造で頑丈な船体、三角帆の発見で向かい風でも前に進める）です。

それまで手漕ぎ船で沿海を走っていた船は、改良された帆船で荒海の外洋を風の方向に関係なく走れるようになりました。

これらの技術の発展でコロンブスは大西洋をアメリカへ航海することが出来（1492年）、ポルトガル、スペインがアメリカを制覇し、インド、東南アジアへ進出が出来たのです。もちろんその後イギリスもオランダもその他のヨーロッパの国々も世界の海に進出します。大航海時代です（1

5世紀後半から17世紀前半)。

日本へポルトガル人が戦国時代にやって来たのも(1543年)、世界進出の一環です。

当時日本もこの科学技術(船舶建造術、航海術、鉄砲)は伝授されました。

しかし徳川幕府は、鎖国をして日本だけの平和を求めました。外航用の大型船(西洋式帆船)の建造を認めませんし(一枚帆の和船)、鉄砲の製造も制限しましたので、技術の発展はありませんでした。

## 6、産業革命

18世紀後半にイギリスで起こった産業革命は、中世末に起こったルネサンスによる科学技術の発展を更に画期的に飛躍させました。

これにより西ヨーロッパは重工業の興隆、資本主義社会、植民地政策から帝国主義国家へと世界で明確に優位の地位につきました。

この西ヨーロッパに遅れてアメリカ合衆国、ロシア、日本が重工業に注力し、植民地政策から帝国主義に参入します。

経済力で、合衆国がトップを走っていたイギリスを追い抜くのは20世紀初めでしょう。

日本が科学技術、工業力はヨーロッパや合衆国に近づいていったとは言え、第2次大戦前に於いては未だ差は大分はありました。

特に、精密な機械の大量生産が出来ません。日本では精密な箇所は手作業になります。

科学、工業技術力が劣るのです。兵器産業では致命的です。

ヨーロッパは産業革命後も今日まで科学技術は従来にはない速さで進歩を続けます。

## 7、フランス革命

1789年に始まり、王のルイ16世を処刑したこの革命は、その後も混乱が続き、共和制からナポレオンの出現で王政に戻り、そして1870年に再び共和制となり、この共和政は今日まで続きます。

この間ヨーロッパ諸国民はこの革命に影響され、王国を封建制から主権在民、国民国家に変革させます。

ヨーロッパの王主権の封建制の終焉です。王制が続く国もありますが、王権は大きく制限され、議会制内閣となって行きます。

フランスが共和制となった頃日本では討幕がなり、明治維新となります  
(1868年)。

天皇制ではありますが、ヨーロッパの議会制度が取り入れられ、選挙権  
は高額納税者から、1919年には成人男子には選挙権が与えられました。  
全てフランス革命後のヨーロッパの政治体制の影響を受けています。

ヨーロッパ史の主要な事象を日本史との関係から見てみました。

以上

2015年12月23日

梅一声

#### 参考資料

- 近世ヨーロッパの歴史 (欧州共通教科書) 第2版 フレドリック・  
ドルーシュ編 木村尚正三郎監修 花上克己訳 1998年
- 教養のための西洋史入門 中井義明等 ミネルヴァ書房  
2007年
- ヨーロッパとは何か クシトフ・ポミアン (松村剛訳)  
平凡社 1993年
- ヨーロッパとは何か 増田四郎 岩波新書 1967年
- ヨーロッパの歴史 (第2版) 欧州共通教科書 木村尚三郎監修  
花上克己訳 東京書籍 1998年
- フランス史研究入門 佐藤彰一・中野隆生 山川出版社  
2011年
- 西洋との出会い (上) (下) 松田毅一 大阪書籍 1982年
- もう一度読む山川世界史 世界の歴史編集委員会 山川出版社  
2009年
- 近世ヨーロッパの歴史  
2015年早稲田大学オープンカレッジの講義録 蝶野立彦
- 世界の歴史5ーギリシャとローマ 桜井万里子・木村俊二



- 中央公論新社 1997年
- 世界の歴史10—西ヨーロッパ世界の形成 佐藤彰一・池上俊一  
中央公論新社 1997年
- 世界の歴史16—ルネサンスと地中海 横山紘一 中央公論新社  
1996年
- 世界の歴史17—ヨーロッパ近世の開花 長谷川輝夫・大久保桂子・  
土肥恒之 中央公論新社 1997年
- 世界の歴史22—代ヨーロッパの情熱と苦悩  
谷川稔・北原敦・鈴木健夫・村岡健次 中央公論新社 1999年
- 世界の歴史26—世界大戦と現代文化の開幕  
木村靖二・柴宜弘・長沼秀世 中央公論新社 1997年
- ドイツ・オーストリア 坂井栄八郎 山川出版社 1999年